

美術－1




「学校・アート・出会いプロジェクト」実施メニュー【基本案】

* 内容は、事前打合せを行い各学校の状況に応じて変更を加えていきます。

■ 基本情報

ジャンル	美術・工芸		
対象となる学年	小学校 4、5、6年生		
対象となる科目（例）	図工・美術、その他（総合学習等）		
実施可能地域	南丹（京丹波町、亀岡方面）、乙訓、山城		
実施回数	2～3回	1回の 所要時間	90分
実施可能人数	2クラス程度		
実施団体	団体名 一般社団法人タッチョナ 代表者名 小島 剛 担当者名 小島 剛		
連絡先所在地等	〒550-0012 大阪市西区立売堀1丁目4-12 立売堀スクエアビル8F-34 TEL/090-4308-5744（小島） FAX/06-6672-0577 E-mail/kojima6912@gmail.com		
団体、講師のプロフィール	2010年から大阪市内の小学校を対象にした現代芸術の体験プログラムをスタート。2012年から京都府「学校・アート・出会いプロジェクト」を受託。2015年に一般社団法人タッチョナ」を設立。2017年以降はこの事業に加えて、継続的に文化庁「文化芸術による子どもの育成事業」受託している。そのほか、地域のアート・センターや施設での子ども向けプログラムに加えて、市民を対象にしたアート・ワークショッププログラムなどを企画・コーディネートしている。 http://touchonart.net		
実施可能な時期（期間）	現状では特に制限は有りません。		

■ 実施内容

対象となるプログラム	体験
<p>テーマ (タイトル)</p>	<p>身の回りの形を切り取って、オリジナル手ぬぐい（またはスタンドガラス風の作品）を作ろう。 (講師：野原万里絵)</p>
<p>趣旨・目標 ねらい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段目にするものを、「物」としてではなく「形」として捉え直すことで、ものに対する視点や意識、価値観の変換が生まれます。 ・ 図画工作や美術で習得した技術や技法を使うことで児童生徒にとっては取り組みやすい。 ・ その過程を経たアウトプットとしては、「てぬぐい」または「スタンドガラス模様の作品」に仕上げます。 ・ 「てぬぐい」の場合、日常的に使用するものに仕上げることで、自身の作品に対する愛着から創造することへの愛着の芽生えを図ります。 ・ 「スタンドガラス」の場合、クラス全体で全員の個性が入り込んだ一つの作品をつくることとなります。
<p>全体計画 (案)</p>	<p>(ワークショップの一例)</p> <p>[1日目] (ものを観察する)</p> <p>学校教室内にある物や風景、床のシミなど様々な物の輪郭をトレーシングペーパーに写し取り、厚紙にその形を転写していきます。</p>  <p>[2日目] (部品となる型をつくる)</p> <p>『てぬぐいの場合』</p> <p>厚紙に転写された形をくり抜き、数個の型紙を作ります。</p> <p>『スタンドガラスの場合』</p> <p>切り抜くための色紙を絵の具を使って、いろいろな描き方で作ります。</p>  <p>[3日目] (工夫してオリジナルのデザインをつくる)</p> <p>「手ぬぐい」の場合、友達の作った形も使いながら、白の手ぬぐいに、くり抜いた形を塗っていき、自分だけのオリジナル手ぬぐいを作成します。</p> 

「ステンドグラス」の場合、の上にくり抜いた形を置いて切り抜き、黒画用紙に配置を決めのりづけする。



＼完成／



全員の作品を
組み合わせると ⇒



最後にできあがった作品をアーティストから講評してもらおうと共に、それぞれで鑑賞しあい、意見を述べ、友達の工夫や普段目にしてきた風景（形）が作品化された様子を知ります。

実施場所

教室や図工室など

講師等

講師 1 人 講師名：野原万里絵+アシスタント 1～2 名
スタッフ 1 人

備考

- ・ てぬぐいの材料はこちらで用意します。
- ・ デザインカッターや絵の具など学校の備品を利用する場合があります。

講師プロフィール：野原万里絵（美術家）

2011 年 京都市立芸術大学 美術学部美術科 油画専攻 卒業

2012 年 Royal College of Art (London) 交換留学

2013 年 京都市立芸術大学大学院 美術研究科絵画専攻 油画 修了

絵画を描く際の感覚的かつ曖昧な制作過程に関心を持ち、自ら制作した定規や型紙などの道具を用いた絵画作品を制作・発表している。また、自身が道具で絵を描く行為に加えて、ワークショップを日本各地で開催し、協働制作による作品も発表。他者とのコミュニケーションを通して、絵画の新たな可能性を模索している。

<http://marienohara.info/>